上顎粘液線維腫の1例

湯浅秀道・飯田 進・向井 陽
池田憲昭・亀山洋一郎*

A case of myxofibroma in maxilla

Hidemichi YUASA・Susumu IIDA・You MUKAI
Noriaki IKEDA・Yoichiro KAMEYAMA*

Key words: myxofibroma (粘液線維腫), premaxilla (上顎前歯部), advanced age (高齢者)

I. 緒 言

顎骨に発生する粘液線維腫は、病理組織学的に線維性の腫瘍組織内に粘液水腫様の構造を有する比較的まれな疾患であり、その本態や発生由来は種々報告がある。今回われわれは66歳、女性で上顎前歯部の粘液線維腫の症例を経験したので、その概要を報告する。

II. 症 例

患 者：66歳 女性。

初 診：1989年6月■日。

主 訴：上顎前歯部歯肉の腫脹。

既往歴・家族歴：特記事項なし。

現病歴：1988年より上顎前歯部歯肉に腫脹を自覚するも、疼痛がなく放置していた。1989年5月に某歯科にて同部の精査を勧められ、当科へ紹介された。

現 症

全身所見：特記事項なし。

口腔外所見：顔貌、所属リンパ節などに特記事項なし。

口腔内所見：3+3 部歯肉唇移行部に骨様硬の腫脹を認め、表面粘膜は正常色、圧痛はなかった。321|23に齶蝕はなく電気歯髓診断陽性であった。また11は欠損しており、抜歯の既往はなかった。

写真1 口腔内線源方式パノラマX線像部分拡大3+3にかけて境界不明瞭、び漫性のX線透過像を認める。

写真2 CT像

上顎前歯部歯槽部から鼻腔にかけ、類円形の腫瘍様陰影を認める。

X線所見：口腔内線源方式パノラマX線像で、3+3部に境界不明瞭、び漫性のX線透過像を認め、内部には不規則な骨様不透過像を有していた。また21|2の根尖の吸収像が認められた(写真1)。CT像では、上顎前歯部歯槽部から鼻腔にかけ類円形の腫瘍様陰影を認め、周囲の骨は膨隆し、一部に骨吸収がみられた(写真2)。

臨床検査所見：特記事項なし。

臨床診断：上顎良性腫瘍。

処置および経過：1989年8月■日に生検を行い、粘液線維腫の病理診断を得た。同年10月■日にGOF全身麻

愛知学院大学歯学部口腔外科学第二講座
(主任：河合 幹教授)

* 愛知学院大学歯学部病理学講座
(主任：亀山洋一郎教授)

The Second Department of Oral and Maxillo-facial Surgery, School of Dentistry, Aichi-Gakuin University (Chief: Prof. Tsuyoshi Kawai)

* Department of Pathology, School of Dentistry, Aichi-Gakuin University (Chief: Prof. Yoichiro Kameyama)

受付日：平成4年3月17日

写真3 病理組織像 (H-E 染色, ×60)

濃縮した核と細長い突起をもった紡錘形、ないし星状の線維芽細胞様細胞が疎に配列している。

酔下で、5 mm の外科的安全域をもうけて、前鼻棘、4+4 を含み切除した。この際、両側上顎洞への交通を認めたが、切除面に腫瘍の露出は認めなかった。欠損部に対し義顎を装用し、2年半を経過した現在も経過観察中である。

病理組織所見：腫瘍細胞では、濃縮した核と細長い突起をもった紡錘形ないし星状の線維芽細胞様細胞が疎に配列し、基質は粘液性で、その成分は乏しかった。歯胚の間葉系組織や歯原性上皮などは認められなかった(写真3)。アルシアンブルー染色(pH 2.5)では弱陽性を呈した。

III. 考 察

粘液腫は Barros¹⁾ らにより報告され、以来線維腫の一型にすぎないとの考えと、別種のものであるとの考えがある。鈴木²⁾ は、線維腫との移行型と思われるものの存在することから、本腫瘍は歯原性線維腫と本態的に区別されるべきものとは考えられず、粘液腫なる名称は厳密には用いるべきではないかも知れないが、一応顎骨粘液腫あるいは粘液線維腫と呼んでおきたいとしている。

本腫瘍の発生頻度について、石川³⁾ は、約30年間に20例を観察したにすぎないと報告しており、比較的まれな疾患とされている。

年齢について沖津⁴⁾ は、本邦における本腫瘍の1932年から1988年まで56年間の99例の報告のなかで60歳以上の症例は男性1例(下顎)、女性1例(上顎)の2例と高齢者に少なく、最高年齢は64歳であったと報告している。また岩佐⁵⁾ は、77歳の男性(下顎)の症例を報告している。本症例は66歳と高齢であった。

発生部位について沖津⁴⁾ は、99例中上顎前歯部の症例は13部と32部の片側例2例と正中を越える7+2の1例の3症例のみで、前歯部に少ないと報告している。またそれ以降に本村⁶⁾ は、1+5の症例を報告してい

る。本症例は上顎前歯部正中に有し、ほぼ左右対称であった。

本腫瘍の発生由来については定説がなく、鈴木²⁾ は、本腫瘍が顎骨に多発すること、また特に有歯部に認められること、組織学的に歯胚の中胚葉組織に類似を求め得ること、本腫瘍の発生年齢の多くが歯牙交換末期であることなどから、歯原性を想定することは誤りでないと述べている。しかし Hasleton⁷⁾ のように、歯原性上皮が腫瘍の発生由来と必ずしも結びつかないとする意見もある。石川³⁾ は、いずれにしても、顎骨に発生する粘液線維腫性病変のすべてが歯原性のものであるか否かについてはなお問題が残されているとしている。本症例は、発生部位が歯槽部であること、1の抜歯の既往がなく先天性欠損歯の可能性のあることから、歯原性の可能性が高いと考えられるが、組織学的に腫瘍内に歯原性上皮は認められず、その確証を得るまでにはいたらなかった。

Barros¹⁾ らによれば、50例中13例に再発を認め、そのうち10例が掻爬症例であったと報告している。本症例では、安全域をもうけて上顎の部分切除を行った。まだ2年半の短い経過観察期間であるが、今のところ再発などを認めず経過は良好である。

IV. 結 語

年齢的、部位的に比較的まれと思われる66歳の上顎前歯部粘液線維腫の症例を経験したので、その概要を報告した。

引 用 文 献

- 1) Barros, R.E., Dominguez, F.V., et al.: Myxoma of the jaws. Oral Surg 27: 225-236 1969.
- 2) 鈴木 進: 顎骨内部に発生する線維性腫瘍についての病理学的研究. 口病誌 26: 298-315 1959.
- 3) 石川 梧朗, 秋吉 正豊: 口腔病理学Ⅱ. 改訂版, 永末書店, 東京, 1982, 491-494頁.
- 4) 沖津 光久, 平沼 康彦, 他: 下顎骨に発症した歯原性粘液腫の1例. 日口外誌 35: 2126-2135 1989.
- 5) 岩佐 昌典, 小笠 原利行, 他: 高齢者に発生した粘液腫の一例(抄). 口科誌 40: 1151-1152 1991.
- 6) 本村 和弥, 山城 正宏, 他: 上顎に生じた歯原性粘液線維腫の1例. 日口外誌 35: 2346-2351 1989.
- 7) Hasleton, P.S., Simpson, W., et al.: Myxoma of the mandible-A fibroblastic tumor. Oral Surg 46: 396-406 1978.